

目次

寄稿: MBA留学から10年ーハーバードが与えてくれたもの (桑島 浩彰)	1-2	寄稿: 英国王立藝術大学院デザイン研究科への留学の話 (三好 賢聖)	5-6
寄稿: 悲惨な被災地をもう見たくない〜気象学分野での学位留学〜 (南出 将志)	3-4	連載: 留学進行中(2)〜大学院 Cooking Co-op編〜 (石原 圭祐)	6-7

寄稿: MBA留学から10年ーハーバードが与えてくれたもの

リンカーズ・インターナショナル
桑島 浩彰

2007年から2010年にかけて、私はハーバード大学経営大学院(HBS)およびハーバード大学ケネディ行政大学院(HKS)のMBA/MPA共同学位プログラムに在籍していました。当時にはやや珍しいDual Degree Programということで、日本政府／世界銀行の奨学金プログラム等を受けながらの3年間の修士号の取得生活でしたが、留学に至ったきっかけ、留学生活、留学してから10年経っての振り返りなどをお伝えできればと思います。

では奇跡的にHBSから合格を得ることが出来ました。また、現地で奨学金を得られたこともあり、もともとグローバルに活躍するにはビジネスに留まらない幅広い知識が必要だろうということでHKSを受験したところこちらも入学を許可されたため、1年目はHBS、2年目はHKS、3年目はHBSとHKSのミックスという大学院生活を送りました。



Pre MBAクラスにてクラスメートと

留学のきっかけは、もともと実家の家業を継げと言われて育ってきたところ(結果としてその話はなくなりましたが)、プロフェッショナルな経営者になることを学生時代から夢描いていたことに始まります。自分が学部生だったころ(99-03年)、将来も見据え外資系のコンサルティング会社でアルバイトをしていたとき、当時一緒に働いていたコンサルタントたちがMBAホルダーだったことから海外のビジネススクール留学を意識し始めました。その中でも当時HBSの看板教授であるマイケル・ポーター教授の書籍に触れる機会があり、いつか彼の授業を直接うけてみたい、というのが素朴なきっかけだったと思います。社会人生活2年目から留学準備を開始し、また社会人としての下積みと出願準備の両立は大変な苦労をしながらも、社会人5年目の2007年に夢がかない自分とし



学期終業後のパーティにて

留学生活は想像以上に過酷でした。特にHBSはForced Curveという下位5%の学生には自動的に退学勧告が課されるという非常に厳しい学校で、発言点が成績の半分を占めるため、私のような日本だけで育ってきた人間には非常にチャレンジングな場所でした。毎回のクラスが実際の経営現場で起きたオリジナルのケーススタディ、および1クラス90人の中、ものすごく速いスピードで授業が展開され、入学して3日後の授業で、自分は絶対に卒業はできないと思ったことを今でもありありと覚えています。入学して1年間は、ありとあらゆる方のお力を借り、勇気を振り絞って毎回の授業に臨みました。人生で間違いなく一番睡眠時間の少ない1年間であり、食事・睡眠時間以外はすべて机に向かう日々だったと思います。ただし、世界中から選抜されたビジネスエリートたちの発言から学ぶことは非常に多く、当時26歳という日本人の中では若

い部類に入りましたが、毎日自分の未熟さ、経験の無さを感じる一方、日々サバイバルの日々を過ごす中、自分が日本を出てグローバルに仕事するための礎を築いてくれたように思います。

なんとか1年目をクリアし、2年目からはHKSでの日々が始まりました。HKSはビジネススクールとは違い、世界中からパブリックセクターのリーダーが集まりますので、雰囲気は非常に和やか、また政治家やNPO、官僚、弁護士、ビジネスリーダーが世界中から集まり、ダイバーシティがある学校です。自身は2年間どんな授業をとってもよいMPAプログラムに在籍していたため、もともと興味があった国際政治、国際関係、安全保障、歴史学、宗教学、公衆衛生学など、経営から一步引いた視点で教養を培うことに努めました。また2年目からは英語にも慣れ、課題活動にも出られるようになり、日本研究で世界的に有名なエズラ・ボーゲル教授の日本人向けの勉強会にも出つつ、ボストンの地で日本の将来について議論する日々が続きました。3年目は、ボストン市内を流れるチャールズ川の兩岸を行き来しながら、単位互換でMITにも顔を出しつつ、夢であったマイケル・ポーター教授の授業の履修もかない、当時金融危機の真っ最中、またオバマ大統領が就任しアメリカが大きく揺れ動く中、経営と公共政策の両面から日々物事を考える毎日が続きました。双方とも実務系の大学院ということもあり、日々のペーパーを除いては論文を書く作業なども無かったのですが、3年間でビジネスという場で世界で戦うための基礎的な英語力、知識などは身についたと思います。

上記のように、日々勉強に明け暮れた毎日ではありましたが、ボストンの街はハーバードのほかMIT、ボストン大学、タフツ大学など大学を中心に作られたような街でもあり、日々生み出される知的好奇心を満たす機会は山のようにあります。また海沿いであることもありシーフードなどもおいしく(最近は二郎系ラーメンなども…)、一方でボストン美術館をはじめとしたアートの街でもあり、勉強で疲れた頭を癒してくれる場所は豊富にあります。冬はチャールズ川が凍るほどの酷寒で、家にもって勉強に勤む季節となりますが、春先以降は素晴らしい気候となり、家族で赴任される方には特に思い出深い地となることと思います。私も少し余裕ができた2年目以降は、家族や友人と日々食事に繰り出したり、美術館詣で、買い物など、ようやく人間らしい生活をエンジョイできるようになりました。



クラスメートの結婚式にて

昨今、MBA留学の是非について、知識を得るだけであれば何も高い授業料と2年間という機会損失をもって留学する価値はない、という意見も散見されますが、多少海外で仕事する機会があったとはいえ日本国内だけで育ったいわゆる"純ドメ"人材であった身からすると、留学、特にMBA留学の価値は単に経営学やファイナンスを知識だけを得るだけではないと思っています。真正面から英語に向き合い、日々の厳しいケーススタディやディスカッションを通じて、世界中から集まってきたリーダー達といかに伍していけるのか、またそのリーダー達と留学後も関係を維持し、共にビジネスをしていけるのか。残念ながら日本が世界経済のトップランナーから脱落してしまった今、改めて留学を通じて如何にグローバルにビジネスができる人材を育てていけるのかは喫緊の課題だと考えています。そのような意味で、ここ10年ほどの間に米国に留学する日本人留学生が半分近くまで減ってしまったことに、個人的に非常に危機感をもっています。

HBS及びHKSでは、単に実務上に役立つ知識だけではなく、卒業後にどのようにリーダーとして生きていけばいいのか、またそのベースとなる倫理的なプリンシプルは何なのか問われる日々でした。そのような意味で、私にとっての留学は、単にアカデミックや実務上知識を得るだけではなく、まさにTransformationalな経験として、どのような人間として生きていくべきかその素地を与えてくれた存在として、心に深く刻まれています。また日々の授業だけではなく、世界各国から講演のために集まってくるリーダー達の話や日常的に聞くことでの視野の広がり、日本ではなかなか得難い経験です。特に日本に育った人材として、世界で活躍できる人材を目指す方には、留学ほどお勧めできるものは他にありません。単に知識を得るための場としてではなく、より広い視点で留学を捉えて戴ければ望外の喜びです。

留学のため渡米してからはや10年。ともに切磋琢磨した同級生が世界中に散らばり、活躍しています。またその同級生たちとも共に仕事を行う機会も増え、刺激をもらいながら、つらい日々ながらも大きな成長の機会を与えてくれたハーバードに感謝する毎日です。少しでも多くの方が留学の機会を目指されることを願ってやみません。



桑島 浩彰

リンカーズ・インターナショナル 取締役社長(米国代表)
(リンカーズ株式会社 専務取締役)

寄稿: 悲惨な被災地をもう見たくない～気象学分野での学位留学～

「巨大台風が接近中、警戒してください!」

気象学の分野について紹介するとき、あるいは自分が気象学を志した理由について紹介するとき、いつも思い出す光景があります。私はPenn State(正式名はThe Pennsylvania State University, 米国東海岸最大規模の州立大学です)の気象学科に進学してまだわずか数ヶ月ばかりの、一人のPh.D学生でした。そして、当時、連日Facebookを埋め尽くしていたとある内容に心を締め付けられていました。

コンピューターのスクリーン上で踊っていたのはSuper-Typhoon Hagupit、フィリピンのミンダナオ島に上陸が予想されていた巨大台風です。最大風速115kt, 最低気圧905hPaにも達したHaqupitは文字通り”最強”レベルの台風で、私が知る限りのフィリピン在住の友人のほとんどが、台風に関する情報をシェアしていました。

- 「巨大台風が接近中、警戒してください!」
- 「常に最新の予測情報の確認を!」
- 「避難経路の確認を忘れずに!」
- 「避難グッズを準備しよう!」

Facebookのニュースフィードを埋め尽くす圧倒的な情報量は、むしろ私の不安を駆り立てました。なぜなら私は、その友人たちが住む地域が、すでに一度台風被害によって崩壊しているのを知っていたからです。同時に、悔しかった。そのような被害をもう起こさせないために気象の道を志した自分には、まだ何かを変える力はないことを知っていたからです。何もできない無力さを嘯み締めながら祈ることしかできなかった記憶として、その経験は私の中に深く刻まれています。

私は現在Ph.D課程卒業を控える時期に差し掛かっています。少しばかり状況は変わったでしょうか。本文は、私が気象学を志すきっかけになったエピソードや博士課程の研究内容などを交えながら、気象学という分野についても少々ご紹介せんとするお話です。拙文ながら、お付き合い頂ければ幸いです。

夢は悔しさの産物でありうるか

少し意外に思われるかもしれませんが、私が知るフィリピン・ミンダナオ島の1度目の台風被災と、私との関わりとをお話するには、夢から始める必要があります。そう言えば、最近珍しく、「貴方の夢は何か」と問われる機会が立て続けにありました。歳を経るにつれて、夢について考える機会も、尋ねられる機会も減ってきたように思います。みなさんは夢をお持ちでしょうか。

自分の夢は一体何なのかと最も必死に考えていたのが、学部生の頃でした。進路を選択する必要があったのですから、当然です。私は「具体的にこれをしてほしい」というものを見つけていない学生で、それでも「人々の力になりたい」という漠然とした理想のままに、世界中様々な地に赴いていました。そして学部3年生のとき、台風で町が丸々流されてしまったフィリピンの地に、災害支援として向かいました。

被災地のボランティアに行かれたことのある方はお心当たりがあるかもしれませんが、ボランティア活動には、被災者の方々ご本人とは全く異なる形の苦悩が伴います。我々ボランティアは、大切な方を亡くされたり、資産やお仕事を失われたりといった、言わば根元的な大変さに対応する術を一切持っていません。多くの場合、そのような悲しみや苦しみを共有することさえできません。苦しんでいる方々を前にして、一時的なお手伝いを行いながら、根本的な解決の一切を行わずにただ歯を食い縛る悔しさが、被災地ボランティアに伴うある種共通の痛みではないでしょうか(あるいは、もっと長期間ボランティアに従事すれば感覚は変わるのかもしれませんが。私はどこにも数週間程度しか滞在できていませんので)。

フィリピンから帰ってなお、私に「これがしたい」という言わばポ



フィリピンでの台風災害支援において、飲用・生活用水確保のためのプロジェクトを企画・実施し、実際に完成した井戸設備の前で。筆者は右。達成感と、なお残る無力感の入り混じった複雑な表情。

ジティブな感情はありませんでした。ちなみに、今でも確たるものはありません。ただ、「もうこんな光景を見たくない」という、現状の全否定だけがありました。ですから、夢という形で問われれば、私はこう答えています。「もう台風被害の(あるいはもっと広く、極端気象現象の)惨状を誰も見なくてすむように、私は気象学を志し、現在研究を行っています」と。

さて、話を戻しましょう。どうすれば台風被害をなくしていけるのか。大変シンプルな話ですが、当時の私はこう考えていました。

「事前に知っていれば良い。いつどこに台風が来て雨が降るのかわかっていれば、事前に準備することも逃げることもできる。それを研究できるのは気象学のはずだ」

今考えると随分と荒っぽいところもあるのですが、とにかくここでやっと気象学の話が登場します。

「ブラジルで1匹の蝶が羽ばたくとテキサスで竜巻が起こるか?」

気象学を、特に予測についてお話する際に避けては通れない話題の一つとして、バタフライエフェクトがあります。本文ではそれについてご紹介します。章題の言葉を、みなさんも一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。

気象においては、完璧な予測というのは不可能です。あるいは、永

続的な高精度の予測というのも不可能です。これは、気象という現象の複雑性、もう少し詳しく言えば非線形性によります。このような系においては、初期状態では近い二つの状態が、ずっと近いままであることは保証されません。これは小さな誤差が小さいままに留まってくれないからで、肉眼では差異を確認できないような殆ど完璧な初期条件・予測モデルを用意しようとも、その差異は時間を経るごとに増大し、最終的に大きな誤差を生み出してしまいます。例えば一匹の蝶が羽ばたいたか否かというわずかな違いでも、二週間後にはそれが、竜巻の発生有無ほどの巨大な差異に成長しているかもしれない。そんな気象現象の複雑性を端的に表現したのが、MITの故エドワード・ローレンツ教授によって提唱されたバタフライエフェクトという概念です。また、こういった現象をカオスと表現します。

このような複雑性があるからこそ、気象の予測は研究分野の一つとなり得ます。確かに気象予測は長期間行えばいずれカオスに支配されてしまうのですが、それでも“ある程度”、例えば数日—数週間程度は、より誤差の小さい初期値を得ることができれば、より誤差の小さい予測を得ることができる(或いは、予測誤差が、初期誤差に対して比較的線形である)ことが知られています。つまり、バタフライエフェクトが支配する気象予測においても、より正確な初期値によって予測向上の可能性があることが、近年の研究によって示されています。

では、どうやって予測を向上させるのか、あるいはどうやって誤差の小さい初期値を得るのか。鍵は観測にあります。もし、当該地域を気象的に観測し、かつ観測された精度の高いデータを気象予測モデルに取り込むことができれば、より正確な初期値を得ることができ、予測を向上できるという寸法です。しかし、台風に関して言えば、この二つの条件を同時に満たすことが大変難しいのです。第一の関門として、台風が熱帯の海の真ん中で発生・発達する点が立ちほだかります。直接観測データを得ることは、近くに島がある場合や、あるいは航空機やドローンを飛ばせる位置まで台風が近付いた場合に限られます。ちなみに航空機観測は米国では盛んですが、日本では最近やっと初めての観測事例があったほどで、まだ殆ど行われていません。さらに、米国の場合でも観測可能であるのは、航空機が到達可能な時間・距離内に限られるので、台風の一生のうちかなり限定的にしかカバーすることはできません。

そのような状況を打破する為に、私のPh.D研究では、人や陸地の有無に関わらず、常に熱帯地域をモニタリングできる現状唯一の観測システムである、気象衛星を台風予測に応用する研究を行っています。しかし、気象衛星の利用にはもう一つの関門を突破しなければいけません。特に私が用いている静止気象衛星は可視・赤外などの画像を撮るものであるため、風速など大気の動きを直接観測していないこと、雲の存在下では雲下の情報が遮断されてしまうことなどが主な障害となり、上手く気象予測モデルに直接情報を取り込むことができていませんでした。驚かれるかもしれませんが、ひまわり8号のような最先端の静止気象衛星から得られる情報のほとんど(実に90%以上)は、予測への活用方法が未だ確立されていないデータであったりします。Ph.Dの研究では、新たに開発した幾つかの手法と、旧来の手法を組み合わせること

で、このように理論的・技術的な様々な問題から利用が困難であった衛星データの、台風への新たな利用方法を開発しています。

”potentially revolutionizing future hurricane predictions”

フィリピンに迫らんとする脅威にただ祈ることしかできなかったPh.D一年生は、博士課程を通じてどこまで変わったのでしょうか。1本目の論文を皮切りに、私のPh.D研究の現在までの成果は、“Penn State researchers found a better way to use satellite data in hurricane prediction models, which could revolutionize future hurricane predictions.”などとして、Penn Stateの広報ニュースを始めとして様々な媒体に取り上げて頂いています(リンクは下記を参照)。「台風予測に革命を起こしうる」と言うのは何とも恐縮ですが、被災地の空に無力を嘆いた私も、少しずつ世界を変えていくことに貢献できているかと思うと、大変嬉しく思います。

4年前に大学院に出願するとき私は、その奨学金の応募書類で

PENN STATE NEWS

Home Research Academics Impact Campus Life Athletics Administration Arts and Entertainment



Penn State researchers found a better way to use satellite data in hurricane prediction models, which could revolutionize future hurricane predictions. Pictured is satellite imagery of Hurricane Karl, which was the focus of the researchers' proof-of-concept study. Image: National Oceanic and Atmospheric Administration

GOES-R satellite could provide better data for hurricane prediction

ペンシルバニア州立大学のプレスリリースに取り上げられた際の記事の一部。
 リンク: <http://news.psu.edu/story/399668/2016/03/24/research/goes-r-satellite-could-provide-better-data-hurricane-prediction>

「様々な災害を経験した身として、研究という社会の方向性を形成する仕事に従事し、社会的弱者が安心して暮らせるような安全な都市を築いていく礎になりたいと考えています」と書きました。今もなお、最初に思い描いた道にいられる幸運に感謝しつつ、残るPh.D課程、そしてその後の進路においても、この道に全力を注ぎ込みたいと思います。もし気象学に興味を湧いた方がいましたら、ぜひ一緒に、世界を少しずつ変えていく夢を追いかけてみませんか。



南出 将志
 ペンシルバニア州立大学気象学部博士課程
 米国大学院学生会代表
 Website: <http://masashi-minamide.tumblr.com/>

寄稿: 英国王立藝術大学院デザイン研究科への留学の話

「かけはし」編集部の方より英国留学体験についての寄稿依頼をいただいた。在英三年目を迎える今、自分としてもこれまでのことを振り返る良い機会だと思ってお受けした。私の場合はデザイン研究という比較的稀な学術領域にいたため、英国と他国の一般的な制度比較について述べるというよりは、英国でデザイン研究を行うに至った経緯について簡単に書こうと思う。デザイン研究には元々美術大学でデザインを専攻してきたような研究者も大勢いるが、同時に他分野から研究者が様々なテーマを持ち寄り、学際的な研究が活発に行なわれている。私自身、元はデザインではなく航空宇宙工学を専攻し、デザインやアートに関わり始めたのは学部四年の頃だった。大学(院)での研究や学外での創作活動はどれも刺激的で多くを学んだが、最終的にどうしても探り足りない間が残った。その間は過去のそれぞれの活動を通して形成されたために必然的に諸領域を横断するもので、果たしてどこでそのような研究を扱えるのか考えなくてはならなかった。自分の興味を十分に探求できる場を探し求め、最終的に英国Royal College of Art(王立藝術大学院、以下RCAと略す)のデザイン研究科という場所に縁があり、今に至っている。

出願プロセスやビザの手続きなどの些細な話はもう自分のブログ²に書いてしまったのでここでは割愛する。今では本誌のような情報源のおかげで留学に興味のある人が事前に多くの情報を手にいれることができる。自分自身、情報収集には非常に苦労したので、これは有益だと思う。比較的成熟した理工学、医学、経済学などの分野は世界の研究機関ごとに異なる得意分野があり、そうした地勢に関する情報は留学を志す人にとって便利にちがいない。比較的若いデザイン研究にも既に同様の地勢があるにはあるがそうした再分析は本稿では控え、それを得意とする批評家的な研究者たちに委ねたい。私がデザイン研究に関してより興味深く感じるのは、必ずしもデザインの中で扱われてこなかったような間をデザインの実践を通して研究することで、科学的または人文的なアプローチでは行き着けないような形の新しい貢献が生まれるところだ。その意味で比較的デザイン研究が成熟した大学院への留学は自分にとって意義深いものだった。



博士研究のきっかけとなった一つの作品「PUWANTS」
- 気泡の浮力を利用して水中で動く彫刻作品(写真: 津島岳央氏提供)

留学に対する意識・きっかけ

今でこそ留学の意義をよく認識できるが、自分は何が何でも留学を願ってきたというわけではない。思えば中学三年のときに

一ヶ月イギリス南部に語学研修に行き何故かすごく「しっくりきた」ときに初めて、頭の片隅で(長期の)留学を意識し始めた。もう少し時期の近いところでは、日本の大学(院)時代に所属していた研究室にいた同僚達の影響がある。彼らは所属していた航空宇宙工学という分野での典型的な研究に縛られず、途上国に行ってもものづくりの研究をしたり、美術の側面からインタラクションの研究をしたりと、国も分野も超えて活躍していた。彼らだからこそ辿り着ける興味を、本人がもつ高度で独特な能力で探求していくという研究の仕方が素直に格好良いと思ったし、自分もそうなりたかった。こうした影響もあってか修士の間にはもう少し外に出て、アーティストやデザイナー、音楽家と共に創作する機会が得られたことも大きかった。彼らにとっての「研究」や物事の見方(how to reason)は理系研究者のそれとはかなり異なっていて、また魅力的だ。科学的厳格さを求める立場とは異なるところで勝負している彼らの振る舞いから学ぶことは非常に大きいし、科学的であることだけが知識の質を支えるものではないと気付かされた。そうしたことが自分の研究にも必要で、またそれを理解してもらえる場所が必要だと感じた。国内にも美学や感性にアプローチする理工学系の分野はあったが、自分が逸脱を図っていた還元主義的な手法が支配的であったように思えた。逆にデザイン系で理工学の要素を取り入れる研究も増えているが、博士レベルの研究指導とその文化が期待できる場所があるかどうか分からなかった。結局、まだ探求し足りないと感じるものが思い切りできそうな場所であり、かつその道に進むのと自分の力がより力を活かされそうだったということだけでもって(割と単純だが)自分にとっては留学の十分の動機だった。留学がその後の将来のキャリアにどう有利になるだろうかといった邪念(?)は意外となかった。

デザインPh.D.

今ではデザイン研究という領域が自分の研究の芽を育てるために如何に重要だったか理解できる。しかし、留学準備当時は何がなんでもデザイン研究がしたいと思っていたわけではないし、正直デザイン研究がそもそもどういうものかよく分かっていなかった。手元にまだぼんやりしているものの研究したいテーマがあって、それを満足に行うために、デザインという分野が最も相性が良さそうだったくらいだった。デザインエンジニアと称する人々の台頭やメディアアートの再流行のお陰で工学系とデザイン及びアートの世界との垣根が下がってきていたことも背景としてあるだろう。結局、世界から新たな研究場所を求めてデザインを含む工学系、コンピュータアート系、技術ベースの学際系、建築系など沢山出願し、そして沢山落ちた。いくつかオファーをもらって、最終的にRCAのデザイン研究科にやって来た。所属するIDE Research専攻¹はデザインと工学の両方に対して適度に成熟した風土がある。デザインの文化を基礎とし科学技術に関する知識をある程度持ちつつも、テクノユートピア的な思想には陥らない。デザインと工学の統合に躍起になるというよりは、それを前提とした技能と

マインドセットを備えた人々が各々の方法で研究を行っている。自分は環境の影響を良くも悪くも受けやすいタイプなので、デザイン及びアート分野のトップ層の学生が周りにいるのは理想的だった。こうした環境の中で、工学系にはなかった新たな言語、探求の仕方やその動機を徐々に知り学ぶことができた。

RCAでの博士研究には論文型と実践型という二つの選択肢がある。前者は人文学系で一般的な文献調査を主とした研究で最大八万語の論文が成果物として要求される。後者では自身の実践研究および最大四万語の論文を提出する。最近では実践型が多数派で、各々の実践群(人工物やプロジェクト)が論文に書かれた新たな知識や主張を具現化し、デザイン・アートにとって本質的かつ非言語的な部分を補う。実践成果物そのものが知識であるという考え方もある。私も実践型の博士研究に取り組んでおり、機械的な模型やアニメーションなど、時には技師の協力を得ながら多様な創作と実験を行う。それと同時に関連分野の文献調査もまた、実践の学術性を高める上で不可欠である。私の場合は、美学、心理学、身体的認知科学などの分野から、自身の実践との結びつきのある研究や理論を探求している。こうした研究の方向性は指導教官からの助言に大きく助けられている。IDE Researchでは入学当初から博士学生一人につき二人の指導教官が割り当てられる。私はIDE的实践の先駆者であり教育者である教授と、アートとコンピュータサイエンスの分野で博士号を持ちデザイン理論を専門とする教授に師事している。五、六週間に一度研究面談をし、その間に細かなやり取りが行われる。研究指導はいつも刺激的で有意義だが、それでも予想外の提案に困惑することは未だにある。しかし大凡の場合、そうした困惑は意外と生産的な結果をもたらすことが多い。総合大学や理工系大学のように、研究テーマごとに研究室が分かれその中に教授がいてその下に助教や学生がいるという形とは異なり、RCAでは教員と学生がルースに配置されている点がユニークで、結果として萌芽的研究が生まれやすいのかもしれない。また萌芽的・創造的な研究は時に非線形な経過を辿る。最終的な調査結果だけでなく、そうした実践の全体的な経過や研究者自身の変化もまた研究の重要な要素と見なす点もデザイン研究の面白いところだ。

例えば今技術系の分野にしながらも(量的)実験評価が支配的な文化に違和感を感じている人、論理だけでなく感性からアイディ

アを得るプロセスを面白いと感じる人、そうしたアプローチの学術的意義に興味のある人にとっては、デザイン研究は新たな考え方を導き出してくれるかもしれない。またこの領域で研究するにせよ、留学経験そのものも国と分野を身軽に横断できるような技と心構えを育む上で非常に有効だと思う。無論その実現はまた別の話で、私の場合は家族や友人、恩師、そして中島記念国際交流財団の存在がなければ叶ってはならず、この場を借りて改めて感謝したい。

¹IDE: Innovation Design Engineeringの略。デザインと工学のハイブリッドを実践する学科で、この分野では世界をリードするプログラムの一つであると思う。博士(Research)と修士はカリキュラムが全く異なるが、共通する哲学はありそうだ。
²kensho 留学記: <http://miyoshikensho.hatenablog.com/>

～作品展示のお知らせ～

人工物の動き振る舞いの美学とデザインへの応用をテーマとした博士研究の中で生まれた作品が大阪万博記念公園内にあるニフレルの企画展「生きものとアートにふれる展」²にて展示中です。アーティストの小松宏誠氏と共作で、泡の力で動く植物を模した彫刻群「フワツツ」が海水魚と水槽内で共存しています。展示というのは成果のお披露目であると同時に、研究手法の一つでもあります。ロンドンからの昨年夏の一時帰国とタイミングがうまく重なり、地元関西での初展示が実現しました。会期は今年三月四日まで。是非お立ち寄りください。
リンク: <http://www.nifrel.jp/cp/art2017/#firstPage>



写真: 和田浩氏提供

三好 賢聖
王立芸術大学院
デザイン研究科イノベーション
デザインエンジニアリング専攻

マックスプランク細胞生物学遺伝学研究所
石原 圭祐

連載: 留学進行中(2)～大学院 Cooking Co-op編～

前回は学部生時代の話を書いたが、今回からは大学院時代の話。学業の話は次の機会に話すとして、まずは自分の生活について振り返ってみたい。気の合う仲間との日常生活は学業の励みにもなる。

家探し

2010年、学部時代の友人3人とともにボストンへ引っ越すことになった。学部のころから始めた、食事当番を回しながら一緒に住む、というのを続けることを念頭にケンブリッジ市内で家探しを始めた。どんな部屋を借りるか相談をしていると、なんと友人の父

親が投資目的で家を買ってもいいと言いだし、見学した一軒目の不動産に一目惚れして彼が家を買うことになってしまった。その家は、ハーバードのキャンパスから歩いて10分ほどのところがあり、元々はイエズス会の研修生が十二人で共同生活をしていた築130年ほどの一軒家だった。自分が住んだ3階の部屋は、本来は召使い用の部屋だったらしい。地下室の1室はイエズス会により改装され、簡単な礼拝堂になっていた。これで友人を大家として家は決まった。ただ、当初の予定より大きな一軒家に住むことになったのでこの家に一緒に住む仲間を4人急遽集めることになった。

「家一軒に8人で住む。要件は週一回8人分の夕飯を作る、もしくは食材の買い出しに行かなくてはならない。興味ある?」

大学院1年目は大学の寮に住むのが一般的な中、こんな誘いに気軽に乗ってくる人はおそらく馬が合うだろうという感覚であった。あと4人のメンバーは意外と早く見つかった。一人目は高校時代の友人で、MITの化学科博士課程に入学するアメリカ人。二人目もまた知り合いの、学部4年数学科専攻のブルガリア人。三人目と四人目は、その年の初めに大学院の面接で知り合い意気投合し、同じように生物学の博士課程入学を決めた中国人とメキシコ人だった。

「Cooking Co-op」

この共同生活の様式、自称はCooking Co-opであり、似たようなものはアメリカの学生街、特に西海岸では珍しくない。中には数十人から百人規模の大きなコミュニティのようなものもある。「シェアハウス」などという軟派な言葉は使いたくないので、日本人に説明するときには「共同自炊生活」などと説明していた。自分たちの場合はストイックに日曜から木曜の週5回の夕飯の食事当番を回す。会計も食費と調理用具、掃除用具購入のためのレシートを集めて均等に支払うようにした。

この共同生活は自分の大学院時代のもっとも楽しい思い出の一つである。毎日午後8時ごろに帰宅すれば夕飯と一緒に食事をする人たちがいて、時折ハウスメイトが友人を招待して輪が広がる。週末には夕食やパーティーも主催した。在ボストンブルガリア人の集まり、ハーバード大学日本人学部生の夕食会、それぞれのPh.Dプログラムの新入生歓迎パーティー、プログラマーとして働いているハウスメイトの会社のバーベキュー会、ハロウィンパーティーなどいろんな人たちが集まる機会があった。小さなゲストルームもあり、誰かしらの友達がその部屋に泊まっている場合が多かった。

共同生活特有のいざこざもあったが、基本的に話して解決するタイプが多かったので、なんとかなった。

MITの化学科に入ったハウスメイトは、所属研究室があまりにもブラックで、1年目の後半で休学、引きこもりになってしまった。みんな心配していたが、翌年の夏には夕食にたまたま来た子と付き合い始め心機一転。大学院を辞めて、料理学校へ入学した。その後、ボストン界隈で有名なシーフードレストランで一早く昇進してシェフになった。彼が毎年本気を出して作ったサンクスギビングの夕食は今も仲間内と伝説になっている。

思い出は何も食べ物に限らない。今から数えると7年ほど前、各々が大学院1年目で研究テーマを模索し、新しい分野に触れた興奮、またそのテーマに対する不安などを毎日の夕飯を通じて話し合っていた。あの空気がとても懐かしい。現在は全員が博士課程を終えて、それぞれの分野で活躍していたり、子供もいたりするが、彼らを思う際、あの始まりの頃を思い出さずにはいられない。



cooking co-opのメンバーと関係者。2013年当時、一緒に住んでいたのは十人(筆者は前列右から二番目)。

石原圭祐

プリンストン大学化学工学科卒業
ハーバード大学システム生物学博士課程卒業
マックスプランク細胞生物学遺伝学研究所、ポスドク(現職)
マックスプランク複雑系物理学研究所、ポスドク(兼任)

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

高野 陽平 辻井 快 佐藤 拓磨
松島 和洋 塚本 翔大

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会など)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

6年間、大学院生として色々ありましたがこの度なんとか無事に卒業いたしました。アメリカでは日本語に触れる機会は意識して作らないとかなり少ないので、ニュースレターの出版作業は日本語がなまってしまうための良い訓練にもなりました(今もなっています)。これからもど

うぞよろしくお願ひいたします。(辻井)

最近、スキーに行ってきました。日本のゲレンデも好きですが、今回行ったユタ州のものは比較にならないくらい大きくてたくさんコースがあり、すごく良かったです。景色もきれいでした!(塚本)

ドイツでは休むときは休むの精神がしっかり根付いています。この辺の精神は1年以上生活してもまだ身につませんが、質の高い仕事をするには質の高い休みが鍵だと同僚は口を揃えて言うので今年こそはオンオフの切り替えをきちんと行い、良い仕事をしたいです。(高野)